

XenosagaI・II - 第十八話 救済 - Hilfe - 下

アルベド： どうやら、ルベドたちのE.S.もこの惑星にやってきたようだな。
——まあいい、艦隊に先行できただけでも充分だ。
————む？
よおう、こんなところで会うたあ思わなかったぜ。
や、死者こそが、この惑星にはふさわしいのかな。くっくくく————

緋い外套の男： ——————

アルベド： ようやく、貴様らが動き出した——
————ということは、”アレ”が近いのかなあ？

緋い外套の男： ————ツァラトウストラは、君にとっても有益なはずだ。

アルベド： さあて、どうだろうねえ。

緋い外套の男： 理解してもらえないのなら、しばらくこの場でおつきあいいたさう。

アルベド： くくく、ゾハルを前に時間稼ぎ、それが本音か。
————いいだろう、貴様らの力、E.S.で測ってみるのも面白い——

緋い外套の男： ——————

—

リヒャルト： ヘルマン、まだ奴らの行方はわからないのか！

ヘルマン： はっ、大気圏突入前の観測から推測いたしますと、アルベド・ピアソラー——

——クークイ・ファウンデーション一党、ともに、このミルチアに到着したことは間違いないと思われます。
——ですが、惑星上の地点までは、特定が困難です。

リヒャルト： ——まあいいよ、奴らもゾハルを目指していることには違いないからね。

ヘルマン：――む！ リヒャルトさま！

何奴――！

黒い外套の男：――――

リヒャルト： まだザルヴァートルも教皇庁軍も、ここへは到着していない。君の正体、興味あるなあ。

黒い外套の男：――奇妙な共生関係だな。

ヘルマン： どういう意味だ？

黒い外套の男： 支配する者がされる者に依存し、される者がする者の存在に、己の罪科を預けている――
さぞ心地よいことだろう。

リヒャルト： ―――つまらん挑発だ。

とはいえ、不愉快であることに違いはない。ヘルマン、相手をしてやれ。

黒い外套の男： ほう、己が短慮を知って、自重しようというのだな。

リヒャルト： 意外だろうけど、その自覚はあるのでね。

黒い外套の男： ほうほう――なかなか賢い、いや賢しい。

ヘルマン： ――それ以上の雑言、控えていただく！

黒い外套の男： 面白い――その E. S. もどきでかかってくるがよい。

――

シオン： あれがラビュリントス――

Jr.： ああ、嫌な記憶と一致するぜ。

カナン： ここで、俺に記録されたデータが解析できるのか。

ジン： カナン、貴方に預けたデータにかけられている強力なプロテクト。

それはゾハルが発する波形パターンを利用したものです。

故に、ゾハルのコントロールルームである、このラビュリントスのターミナルでなら外せるはずです。

カナン： ああ、細かい説明はいい。早いとこすっきりしたいものだ。

Jr.： よっしゃ、突入しようぜ。警備もあれくらいなら、なんとかなる。

ジギー： 先ほどの E. S. に感謝しなければならんようだな。

シオン： ええ、行きましょう！

兵士： 誰だ！？

【 戦闘 VS カルニコス I 型改×2 】

ジギー：このメインゲート、かなり頑丈にできているな。

ジン：ちょっと見せていただけますか。

やはり――十四年前の制御コードがまだ生きていましたね。

ケイオス：さすがですね、大尉。

ジン：いえいえ、幸運ですよ。

ですが、ここから先は運に期待するわけにもいかないでしょう。

警備は厳しくなりますよ。

Jr.：ああ、わかってる。でもな、行くしかないんだ、俺たちは――行くしか。

ジン：ええ、その通りですね。

ラビリントス

シオン：ここがラビリントスのメインターミナル――

ジン：ようやく、たどり着けましたね。カナン――これであなたを、解放することができますよ。

カナン：ああ、はやく終わらせてもらおう。

これ以上、この厄介モノを頭の中に置いておきたくはないからな。

シオン：ねえ、カナンさんの中にあるデータって、いったいなんなの？

ジン：一言で言うなら、ミルチア紛争の首謀者の正体――と言ったところですか。

シオン：ちょっと待ってよ、紛争の首謀者って――

ジン：そう、狂人ヨアキム・ミズラヒ。世間ではそう言われてますね。

でもね、世間で認識されていることのすべてが正しいとは限らない。

シオン：どういうこと――？

ジン：もうすぐわかりますよ。

???：――それはどうかな？

ジギー：お前は――！

マーグリリス：ほう、プレロマに忍び込んできた、連邦のサイボーグか。それに、百式プロトタイプに

U.R.T.V.、ヴェクターのアンドロイド――なるほど、異端審問官の手に負えぬわけだ。

それに――十四年ぶりだな、ウヅキ。

ジン：できれば永遠に、会いたくはありませんでしたが――

刃は珥人[おおいひと]に向けるにあらず、己が心を刻むものなり――

そう、師は言っていたはずですが――

マーグリス：ふはは――こいつは愉快だ！ 貴様も絡んでいようとはな！

ウヅキ――賢しくもまた、俺の前に立つ男よ！

ジン：色々と調べたいことがありましてね。親切な方々がここまで送ってくださったんですよ。

マーグリス：ふ、戯言を――

ジン：――ここは昔のままだ。十四年前の記録を消去しなかったのは迂闊でしたね。

連邦に、もはやあなた方の戻るべき場所はない。

それとも――当時はそんな余裕はなかったということですか？

マーグリス：相変わらず、口が減らん奴だ。だが、もうこの先へ進むことには、意味はなくなったぞ。

我々はすでに当初の目的を達成し、ゾハルを制御下に置きつつある。

貴様らがいくら足掻いたところで、結果は明白だ。

Jr.：ぐだぐだ言ってるんじゃないっ！ あれはてめえらの手に負える代物じゃねえんだ。

なにが起こるか、わかってんのかっ！

マーグリス：理解しているさ。我らが正義のもと、グノーシスと――

ある意味それ以下ともいえる存在――雑草にも等しい愚民どもが、少々、消えるだけだ。

――アリアドネのようにな。

Jr.：て――てめえっ！

マーグリス：だが、そのデータの解析の結果をむざむざ見せてやるわけにもいかんな――消えろっ！

ジン：みなさん、解析終了まで、カナンを護ってください！

シオン：わかったわ！

【 戦闘 VS マーグリス 】

マーグリス：はあ、はあ、相変わらず、小癪な連中だ――

だが、お前たちがいかに足掻こうとも、いまさら、なにも変えられん。

せいぜい、己の無力さを思い知るのだな。

ウヅキ、この決着つけたくば、生き残ることだ。

Jr.：か、勝った、のか――

ジギー：相変わらず、怖ろしい相手だった。

カナン：――だが、お前たちの戦い、甲斐はあったようだぞ。

ケイオス：カナン――

ジン：解析が終わったのですね。

カナン：ああ、そのようだ。こっちへ来てくれ。

ジン：なるほど、そういうことでしたか――

シオン：兄さん――

ジン：え、なんですか？

シオン：なにって、私たちもその解析結果を知る権利があるんじゃないの？

ジン：――――――

――そうですね、たしかにその通りです。

（シオンには知らせたくないことがある――それは私のエゴ、だ――）

いや、すみません。みなさんにも、きちんとご説明しなくてはなりませんね。

Jr.：ああ、そうしてもらえるとありがたいな。

ジン：U-TIC 機関――現在は武装組織と成りはてていますが、その出自はご存じですか？

Jr.：ああ、ゾハルを研究するためにヨアキム・ミズラヒが創設した研究機関――だったよな。

ジン：その通り、もともと U-TIC 機関は連邦政府の一機関だったんです。

ゾハルの研究で得たデータを使って、ミズラヒ博士がそれを武装組織へと変えていった――
管理者である連邦政府に知られることなく――世間ではそう信じられています。

でもね、これがどう考えてもおかしい。

研究や軍備のためには、莫大な資金が必要となるはずですよ。

しかし、連邦がそれほどの予算を配分していた事実はない――――

シオン：誰かが、裏で資金を提供していた――？

ジン：そう考えるのが自然ですね。

ところが、U-TIC 機関に関わりのある企業のほとんどは、存在さえしないただのダミーだった。

――ただ一社を除いてね。

シオン：ただ一社？

ジン：ハイアムズ重工業――このデータの中には、すべてのダミーの情報が記録されています。

つまり、U-TIC 機関の背後にいたのは、ハイアムズただ一社だった。

そして――ハイムズ社代表のハインラインという人物――

彼は移民船団の枢機卿の一人であると――

Jr.: そうか――そうじゃないかとは思っていたけどよ。

やっぱり、U-TIC 機関は移民船団と繋がりがあったのか。

モモ: で、でも――モノデータベースでは、移民船団はロスト・エルサレム脱出以来、

争いを好まずに銀河を放浪し続けていると――

ジギー: もちろん、それも事実だ。だが、もう一面の真実も存在する。

ケイオス: ――――

シオン: なんですか、その真実って――

ジギー: 彼らは自分たちを”ゾハルの民”と呼び習わしている。

シオン: ゾハルの民!

ジギー: そうだ、ロスト・エルサレム脱出時にオリジナルゾハルを宇宙へ持ち出したのが彼らであり、

その管理を義務、もしくは権利であると自認している存在――それが移民船団だ。

Jr.: なるほどな、エミュレーターの保護を進める俺たちの前に、だから U-TIC 機関が現れたってわけか。

いや、奴らにしてみりゃ、俺たちの方が、ゾハルの周りを

ちょろちょろしはじめた、新参者なんだろうな。

モモ: パパは――パパも移民船団と関係が?

ジン: ええ――彼は惑星アブラクサスの出身です。

ジギー: ―アブラクサス!

カナン: そうか、なるほど――

ジギー: ――――

カナン: アブラクサスは、移民船団がその成立初期に植民した惑星だ。

他星系からの人口流入も少なく、人種的にはほぼ統一されている。

シオン: つまり、ミズラヒ博士もゾハルの民だった?

Jr.: 十四年前、ミズラヒがやったことの裏には、移民船団がいたわけか?

ジン: このデータから、そこまでは断定できません。

ですが、その可能性は極めて高いと言えるでしょうね。

モモ: そんな――

シオン: じゃあ、いま彼らにゾハルを渡したら――

ジン: そう、おそらく十四年前のあの悲劇を繰り返すでしょう――

シオン：急ぎましょう、ゾハルのところへ――

モモちゃん――つらいでしょうけど、がんばって――

モモ：はい――モモ、大丈夫です。

シオンさんや Jr. さん、ジギーやみんながいてくれるから――

シオン：――うん。

――

Jr.：どうやら間に合ったようだな。見ろよ、ゾハル――オリジナルだぜ。

シオン：ここは――夢で見た場所――フェブの妹たちが閉じ込められた檻――

Jr.：――檻？

KOS-MOS：シオン、前方のカプセル内から微弱ですが、生体反応が出ています。

シオン：生体反応――

KOS-MOS：間違いありません。形式はかなり古いものですが、たしかにレアリエンです。

シオン：そんな――これが――セシリーとキャス――？

あ――ああ――セシリー、キャス――

Jr.：ちょっと待てよ――これが――レアリエンだっていうのかよ。

モモ：どうしたんですか、Jr. さん――

Jr.：来るな、モモ！

モモ：シ――シオンさん――な――なんですかこれ――こんな――ひどい――

シオン：セシリー――キャス――

そうだ、私は――この子たちを――知ってる――

シオン：見つけた！ こんなところにいたの――セシリー、キャス！

セシリー：ほら、これ見て。

シオン：うわあ、綺麗なお花！

キャス：向こうにたくさん咲いてたんだよ。

シオン：ねえ、みんなで花束作ろう。フェブに持ってってあげるの。

セシリー：それいい！

キャス：それいい！

シオン：でしょ！

セシリー：じゃ、行こう！ こっちだよ――

シオン：あ、待ってよ！ セシリー！ キャス！

待ってよ――

待って――

シオン： いや――なんでこんなこと――

セシリー！

キャス！

ケイオス： 彼女たちを助けることはできないのかい？

KOS-MOS： 残念ですが、システムとの融合により個体としての機能、意識はすでに失われているものと思われます。

???： その通りさ。いまシステムから切り離すことはこいつらの死を意味するんだぜ。

おっと、間違った。”機能停止”だったな――

Jr.： ふざけやがって！ なんのためにこんなことを――

蒼い外套の男： おいおい、いきりたつなって。俺は親切に教えに来てやってただけだぜ。

このシステムを組み上げた奴にとって、必要なのはこのレアリエンの意識だけ。

生体のままじゃ使い勝手が悪いってんで、こうしたってわけよ。

モモ： 使い勝手――

蒼い外套の男： だから、俺は教えに来てやったのさ。こいつらを哀れに思うなら――

はやく楽にしてやるしかない――ってな。

シオン： そんな――――

蒼い外套の男： できるだろう、シオン？

お前にとっちゃ、憎いレアリエンの片割れだ。

このままだと、こいつらはゾハルのエネルギーを汲み出して、危険なものを甦らせる。

はやく止めなくちゃならんよなあ。

大義名分が、罪悪感を引き受けてくれるんだ。楽な仕事だろう、ええ？

ジギー： この音は――

Jr.： これは――ウ・ドゥの声！ やばい、システムを止めろ！

このままだと――奴がふたたび目覚める！

シオン： なにをするの、KOS-MOS！

KOS-MOS： シオン、下がってください。システムを破壊し、ゾハルへのバイパスを遮断します。

シオン： 待って、KOS-MOS！ あそこにはまだ――

KOS-MOS： シオン、妨害行動に対しては、強制的な対応を選択せざるを得なくなります。

シオン： でも――

ケイオス：（―――やはり、いまのシオンには重すぎる運命なのかもしれない――）

蒼い外套の男：どうした、撃たせろよ。お前が悪いんじゃない、そうだろう？

シオン：―――！

フェブロニア『シオン――』

シオン：フェブ―――

フェブロニア：シオン――妹たちを解放して――

シオン：フェブ――どうして？

他に方法はないの？ きっとなにか、セシリーとキャスを救う方法があるはずよ！

フェブロニア：シオン――あなたは昔と変わらない――

シオン：三局へ行けば、切除された器官を代用するものが――うん、問題はそこまでの移送――

フェブロニア：あなたはいつもそうだった――優しい子――

シオン：きっと、きっとなにかなる――

そうでしょう、フェブ？ 私はそのために呼ばれたのよね、

あの子たちを救うために、私が必要だったのよね――

フェブロニア：そうよ――あの子たちを救うために、あなたに来てほしかった。

そして、そのためになにをすべきか――あなたになら、わかるはず――

シオン：フェブ―――

―――

――うん、わかる。

――ほんとは、わかってた。

フェブロニア：――ごめんなさい、シオン。

シオン：うん、いいの。本当だったら、自分がやらなければならなかったのに――

そう考えるフェブの気持ち、わかるもの――

フェブロニア：シオン―――

シオン：私は――フェブの代わりを果たすために、ここへ来たのね―――

フェブロニア：―――ありがとう、シオン。

蒼い外套の男：どうした、撃てよ。撃たせてみろよ。

シオン：―――ええ、そうする。

蒼い外套の男：―――！？

シオン：KOS-MOS、出力を 0.005 に固定。照射時間 1 秒ずつのバーストで打ち抜きなさい。

KOS-MOS：了解しました、シオン。

シオン：カウント、はじめます。10、9、8、7、6――

ケイオス：シオン、君は――

モモ：シオンさん――

Jr.：よせ、モモ。シオンだってわかってる。

モモ：は、はい――

シオン：3、2、1――発射。

蒼い外套の男：――

撃った、撃ちやがった――

さすがはレアリエンを憎んでるだけのことはありやがる。あっさり撃ちやがった――

はははははっ、撃ちやがったよ――

シオン：――

これでよかったのよね、フェブ――

蒼い外套の男：フェブ――だと？

シオン：そうよ、私にはいまもあの子たちのお姉さんの声が聞こえる。

だから撃ったの。フェブの代わりに――

蒼い外套の男：フェブ――

いまも――聞こえる――聞こえる――のか？

シオン：え？ ええ――

蒼い外套の男：そうか――

――

Jr.：あ、おい――

ジン：――逃げられましたか。

シオン：（なぜ――あの人、フェブを知ってるの？）

？？『ほう、ゾハルの波動が弱まったかと思えば、こんなところにまでネズミが入り込んでいたとはな。』

Jr.：あれは――

ジン：移民船団の長――立体映像ですか。

シオン：まさか、ゾハルを――

教皇セルギウス『ほう、いろいろと気づいているようだな。

本来ならば、貴様らのような輩に教えてやる必要などないのだが、――まあ、よかろう。

ゾハル――あの物体は元々我ら”オルムス”の所有物だ。

そう、歴史の端緒以来、我々がその管理者であった。

それをどう使おうと、我らの自由。――それが道理というものだ。』

ジン：オルムス――それがあなた方の本当の名か。

教皇セルギウス『そうだ、オルムスは遙か太古――救世主が磔に処される以前から、世界の闇に存在していた。

移民船団もまた、我らオルムスの偉業の一部にすぎん。』

Jr.：へ――議会でべらべらを愛を説いてるときとは、ずいぶん雰囲気が違うじゃねえか。

教皇セルギウス『人は――いや、宇宙を満たす全存在はゾハルと我らオルムスによって導かれなければならん。

そして、より高き存在へと至る――それこそが、我らが神により課せられた使命。』

シオン：――そのために、そんなくだらないことのために、セシリーとキャスを――

教皇セルギウス『セシリーとキャス？ ああ、あの生体パーツか。

なにか問題があるかね。もともと、そのために造られた道具だ。』

シオン：ふざけないで、認めない――私は認めないわ！

教皇セルギウス『――認めない？ ならば、認めさせてやろう。我らが神から受け継ぎし力を！』

『貴様らに制御ユニットの生体パーツを破壊され、持てる力のすべてを発揮することはできなくなった。

だが、これまでに送り込まれた波動だけで、もはや何人たりとも、この力を止めることはできん。』

ジン：まさか――”プロトΩ[オメガ]”か！ 甦らせていたとは――

教皇セルギウス『ほう、これを知っているとはな。』

ジン：ええ、十四年前に嫌と言うほど、思い知らされましたからね。

ゾハルのエミュレーターで起動したにも関わらず、その力は強大だった。

連邦軍の艦隊を瞬時にして、吹き飛ばすほどに――――

稼動停止させるには、多大な犠牲を払わねばなりませんでした。

教皇セルギウス『なるほど、あの時の降下部隊の生き残りか。』

ジン：ええ、そして――あなた方の計算違いもまた、すべて見せていただきました。

シオン：計算違い？

ジン：ええ、ミズラヒ博士の裏にいたのは彼らオルムス――――

紛争の引き金を引いたレアリエンの暴走も彼らの実験の一部だった。

しかし、ウ・ドゥが目覚め、グノーシスを出現させたことは、計算外だった――違いますか？

教皇セルギウス『ふん、その通りだーすべてはミズラヒーあの男の過ちよ。

潤沢な資金ばかり欲しておきながら、煉獄の扉など開きおって。』

ジン：そして、博士は自ら過ちを正したーということですね。

教皇セルギウス『その通り、彼奴はゾハルとウ・ドゥをミルチアごと隔離したのだ。

その力を誰の手にも及ばぬ場所に封印することで、災厄を最小限で食い止めようとしたのだ。』

ジン：やはり、そうでしたかー

モモ：あの、どういうことですか？

ジン：モモさん、あなたのパパはねーあなたの産まれてくる世界を救おうとしたんです。

そして、いちばん信頼できるあなたの中に、その秘密をしまったんですよ。

モモ：じゃ、じゃあー

ジン：ええ、あなたの考えとおり。

モモ：パパーパパはやっぱり、世間で言われているような”狂人”じゃー

教皇セルギウス『いいや、狂人よ！

ゾハルの民としての使命を忘れ、愚民どもを救うために、プロトΩをゾハルとともに封じたのだからな。

ーだが、それはもうよい。プロトΩ、そしてゾハルは、我らが手に還ったのだからな。

この力によってグノーシスを一掃し、星団すべてを、我がオルムスの名の下に統治する。

もっともーほとんどの連邦市民は、U.M.N.と連邦の体制によって腑抜けとなって久しい。

わざわざこれを使うまでもないかもしれぬがなー』

ジギー：なんというー

Jr.：シオン、どいてろ。

シオン：ううん、私だって赦せない。止めてみせるわー

???『貌下、お下がりください。こやつらの相手は、私がいたしましょう。』

教皇セルギウス『ほう、マーグリ配下の異端審問官か。』

ペレグリー『はっ、貌下の御身は一命を賭してお守りいたします。』

教皇セルギウス：（ふんーハインラインの手の者が。まだ形式だけは墨守するつもりか）

ジン：ペレグリーーまさかこの惑星で再会することになろうとはね。

ペレグリー『なにー？ ジン・ウヅキか！』

ジン：君は変わらない。まだあの男とともにいるのか。

ペレグリー『言うな！ それが納得できないなら、あなたが司令を支えてみせよ！

それがかなうなら、私などがー』

シオン：兄さん――

ジン：ああ、大丈夫ですよ、シオン。昔なじみと思いがけず再会したとはいえ、
久闊を叙す場でないことくらいはわきまえています。

教皇セルギウス『異端審問官よ――』

ペレグリー『はっ。』

教皇セルギウス『我はこれより、プロト Ω により、Ω システムを発動させる。
その身を捨ててでも、なるべきことを、なすがよい。』

ペレグリー『心得ました――』

ジン：ペレグリー！

ペレグリー『話すことなど、あの時に尽きたはずだ。繰り言はよせ。』
（いまはまだ、これが私のなすべきこと――）

ジン：――私には、君を変える力はない、そういうことか。あの時と同じに――

Jr.：おい、いいのかよ！

ジン：かまいません、こちらも E.S. を呼びましょう。

シオン：兄さん――それでいいの？

ジン：彼女は、おのれのなすべきことに迷いを抱いてはいません。
ならば、こちらも迷うわけにはいかないでしょう。道半ばで斃れるわけにいかぬのなら――！

モモ：来ます！

【 E.S. 戦 VS E.S. Issachar 】

ペレグリー『く――これがあなたの答えか、ジン！』

ジン：その通り――帰ってマーグリリスに伝えなさい。もう、私の迷いはない、と――

ケイオス：（迷いは、ない――）

ペレグリー『――断る。言葉も感情も、己で伝えろ。司令もそれを望んでいる。』

カナン：逃がしたか――

Jr.：よかったのか？

ケイオス：しょうがないな。いまの僕らには E.S. を完全に破壊する力はないしね。

ジギー：む、この揺れは――

ジン：く――プロト Ω が目覚めましたか。

脱出しましょう。

シオン：ええ、はやく地上へー

ジン：違います、この惑星からですよ。

シオン：ええ！？

ジン：本当に、あれが目覚めたのならー
この惑星は終わりです。

Jr.：やべえっ、E.S.で離脱するぞ！

ケイオス：くっ、さっきの戦闘でパワーがー

モモ：！ ラビリントスが崩壊します！

いえ、これはー地表が！！

ジギー：くっ、呑み込まれるー

？？？『みんなーこれからE.S.を回収します！』

シオン：その声ーアレンくん！？

アレン『ちょっと荒っぽいですが、赦してくださいねー対ショック姿勢を！』

Jr.：対ショック姿勢ってー

ジギー：くー振動が激しくなるぞ。

アレン『行きますよぉっ！』

Jr.：な、ななな、なんだぁっ！

シオン：ーエルザよ！

アレン『みんな、はやく乗ってください！』

シオン：アレンくん！

ジン：よし、行きましょう！ すぐに出してください！

トニー『よっしゃあっ、ロジカルドライブ緊急起動！』

エルザ 🗡️

シオン：そんなーミルチアがー

Jr.：嘘だろー惑星を破壊しやがったー

ジン：かつて、ミルチア紛争時に猛威をふるったプロトΩは、完成体ではありませんでした。

プロト Ω を巨大なシステムの中核とする、真の超広域破壊兵器——Ω システム。
その力は、想像を絶します————

シオン：————

（ネピリム——なぜ？ なぜ、あなたは現れないの？

あなたの言うとおりに、ミルチアへ来たのに——ミルチアが破壊されたのに——

私はまだ、なにも答えを手に入れてはいない——

なぜなの————？ ）